

(社) 協同総合研究所

理事長 岡安喜三郎 さん

今回は元連合会の専務で、今はワーカーズコープの研究所である協同総合研究所の岡安さんからお話を聞くことができた。昨年の予定が1年遅れて実現した。インタビューはハイテンポで進み、ほとんど滞るところもなかった。大学生協の青春時代が、岡安さんのそれとも重なっていたような印象を受けた。今も社会問題に正面から取り組む岡安さんはやはり大学生協のリーダーであり、生協組合員が共助を超えて果たすべき役割を教えてくれる。

わたしが育った協同組合・四十余年

1. 悪ガキほどではないが奔放に育ちました

名和 お忙しいなかインタビューを受けていただきありがとうございます。まず冒頭に、ご出身と、そこでどのようにお育ちになられたのかについてお伺いしたいと思います。

岡安 わたしは埼玉県の出身です。昭和23年(1948年)1月、久喜町(現久喜市)で生まれました。生家は農家で江戸時代は名主でもあったようです。



子供の頃の記憶はほとんど遊びです。「ベーゴマ」「ビー玉」「釘刺し」「めんこ」「冬の凧揚げ、夏の川遊び」などです。お寺の森や空堀の中を駆けずり回る「戦争ごっこ」(軍人将棋に似たルールがある)もやりました。夕方近く紙芝居屋さんが拍子木を鳴らすと、お寺の参道で遊んでいたガキどもが集まり、買ったニッキや水飴をなめながら紙芝居を観る。こんな記憶です。近所の

いろんな学年がいっしょになって遊んでいた。近所ではない同級生とは、あぶない遊び、そのころは問題にならないが今では問題にされる遊びも結構やりましたね。オートバイとか空気銃などを触ったこともあります。

名和 そこでいわゆる「悪ガキ」として奔放に育ったということですか。

岡安 悪ガキという程ではないと思いますが奔放に育ったということでしょうね。

名和 コミックで「三丁目の夕日」というのがありますが、あのような感じですか。

岡安 そうですね。その田舎版だということでしょうか。遊び集団はもっと大きいですけど。地元の小・中学校に通っていましたが、成績の面でも注目されていたという記憶があります。自分でも分かっている、他の子どもは怒られてもわたしは怒られないとい

う感じでした。ただ、そういう「立場」に何か変な感じでした。ある種の「差別」の反映ですよ。ただ違和感はあるつつもそのままでした。何が問題かはその頃分かっていませんでしたから。

名和 わたしの場合、朝鮮人部落に対する差別を身近に感じるがありました。

岡安 そうですね、私にとっては、貧乏によって人を馬鹿にする、差別するということの印象が強かったですね。トタンを敷いただけの屋根と入口がムシロという家がありました。疎開者だと聞いたこともあります。一つの集落になっているわけではありません。長期にわたって学校に来ない子もいました。それはいろいろです。出てこなければ勉強は分からなくなります。だからさらに出てこない。結局全く分からなくなります。

わたしはそうした学校に来ない友だちが気になって訪ねたりもしていましたが、その原因の深刻さを理解していたわけではありません。人間みんな同じはずなのにといい程度だったと思います。

名和 差別の問題について、西日本とはまた違う特徴があるということでしょうか。

岡安 違うとはよく言われます。大学に入ってから、学生寮のなかで、未解放部落の成り立ち、それに対する差別、在日朝鮮・韓国人に対する差別問題の歴史と実態を聞いて知ることとなりました。そこで「これは歴史問題であり、社会問題なんだ」ということに鮮明になるわけです。

2. 理科系学生が学んだ社会問題

岡安 小学生の頃から機械大好き人間で、小学校の頃は真空管ラジオ（四球式とかスーパー）の作製・修理に凝り、中学ではトラクターのエンジンを分解して父親に怒られましたけれど、オートバイやクルマ、ラジオなどの雑誌の設計図や技術用語などを理解するために勝手に数学や物理などの本を読みふけていました。工業高校進学が漠然としたイメージでした。そういうこともあって中学を終える頃には、高校で学ぶ「数Ⅱ」（当時の旧課程）程度の参考書は読破した記憶があります。

結局高校は電車で25分の普通高校に入学しました。大学の理工系がイメージされてたんです。高校でも理科と数学ならほぼ4月に教科書を手に入れてすぐに問題を解いて「読破」しました。高3の時には大学教養課程の程度の数学に手を出していました。ドイツ語やフランス語にも興味がありましたね。受験勉強に飽きていたからかも知れないです、大学の二語は結局ロシア語なんですけれども。

東京大学理科一類に入学後、1ヶ月くらいしたら授業には余り、と言うよりほとんど出なくなりました。5月の中ごろから駒場寮の寮委員になってしまったんです、それも新生のくせに副委員長です。寮委員は自分の部屋から移って寮委員会室で生活しました。寮委員というのは「24時間勤務」なんです。電話の取り次ぎのローテーション（寮務のおばさんの休日対応）、ビラ作成・配布から寮食堂経営の管理や「残食」（予約

制なのに食べなかった人の分は、権利放棄とみなして安く販売する) 提供配膳係応援まで。あまり風呂にも入らず、何か薄汚れていたんでしょうか、浪人して入ってきた1〜2歳年上の寮生からわたしが年上と思われることしばしばでした。

そもそも何で副委員長などやったのか？ 駒場の学生寮はサークル制といって、5〜6人毎に1部屋確保します。新入生は先輩から勧誘されて合意で名前を連ねます(一



応)。ですから同部屋になった先輩たちの話(弁舌)を聴くのに違和感はありません。でも今度は毎日聴くこととなります。隣室からもしょっちゅう来ます。その1人は奈良の部落出身のかたでした。理不尽な扱いの話一杯聴きました。若いから正義感がみなぎったんでしょうね。どんどん活動に参加していました。「ナントカもおだてりや木に登る」のたぐいです。

活動にハマれば授業なんてどこ吹く風。寮は学内にあったんですけれど、歩けば5分ほどの教室なのに「授業で」行くことはほとんどなかったですね。実験科目は出席しましたけれど。好奇心が旺盛ということにしておきますが、大学の科目以外に次から次に興味関心の対象が広がるという状況でした。真面目なことについても、不真面目なことについても。

真面目な面では、経済学とか哲学とか、それなりにマルクス主義を独学で懸命に勉強したと思っています。先輩から教わるというより自分で本を読んだ記憶のほうが鮮明です。キャンパス周辺の喫茶店は良く通いました。単位科目でも授業に出ないで本を読んで勉強するということがほとんどでした。活動の時間と合わないんですから。

名和 当時の大学にはそうした寛容さがあったんですね。

岡安 本当にそうですね、今では考えられないことだと思います。高校時代にかじっていた物理や数学については授業に出なくとも試験はなんとかなりました。他の科目でも、試験が近づくと寮の仲間が山を予測してくれたり、試験範囲を教えてくれたり、結構活動している者に優しい雰囲気がありましたね。学生からだけでなく、教員も。

それは本郷(工学部)に進学しても同じでした。同期入学の大学院生よりも留年したこちらが威張ってられるんですから。東大紛争(東大闘争とも言います)後の本郷進学ですから、「誰のおかげで大学院に居られると思ってるんだ」なんてね。試験「内容」を教えてくれた(どの場面かは言いません)後輩よりもいい点数を取って、「もう教えない!」と言われたり、まあ、いろいろありました。

活動ばかりしていて授業にもろくに出ず、実験科目も必要最小限の出席とレポートでしたので、大学の専門学問においてはお世話にはなりましたが、師と仰げる教員はいませんで、生協に就職し、理事会などで先生たちと討論して初めて、やはり先生たちは凄いな、ということを感じました。なにせ同じテーマでいわば対等に議論できるという

経験は余りにも貴重でした。先生たちも「教えてあげる」という姿勢ではなく、真摯に意見をおっしゃる。論理的に質問し攻めてくる。そうなるともたこちらにも勉強したくなるわけです。逆に学生時代はそういう機会は余りなかったということです。

名和 卒業後は如何でしたか。

3. 大学生協の職員時代

岡安 4年生の夏か春頃、研究室の指導教員から実家の近くにある石油系会社の研究所を勧められましたが、技術的には関心があるものの、公害問題もからんで最終的には自分の一生の仕事かな、という悩みがありました。留年もしていたので、同年齢の大学院卒と競争してもしょうがない。ならば、自分の専門は工学か社会科学かという究極の選択のようなものです。自分が学生時代に培ったのは社会運動のさまざまな力なのかもしれない、こんなに人間に関心を持つようになったのは運動のおかげであると。でも、さまざまな活動をしながらも、生協の活動だけはやっていませんでした。

名和 それはどうして大学生協に？

岡安 遡れば二十歳の頃、東大紛争の最中に、ブルガリア・ソフィアで世界青年平和友好祭という世界イベントに参加する機会に恵まれました。滞在費と交流は当時の社会主義国がスポンサーです。そこで南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）の青年達とも交流しましたが、そのときいっしょに行った大学生協連職員の人と知り合いになり、それが縁で大学生協に誘われました。

聞けば生協事業にも食品などの分析をする研究所もあるというじゃないですか。工学部なので「そういう仕事もありかな」とも思いました。人より年を食って入る自分でも生協だったらいつかはリーダーに、との気持ちもありましたけれども。

東大生協に就職すると指導教員に伝えたところ、なぜか単位取得が急に楽になったという印象がありました、思い込みかも知れませんが。3月卒論発表会で学科の主任教授が言われたのは「良くまとまりましたね、ところで単位はあとどのくらい残っているのか」という評価と質問です。質問に答えるとその場で他の教員に根回しです。さすがに日科技連の重鎮だなあと、啞然と感謝でした。卒業認定会議はわたしの結婚式の前日でした。「OK」はその時に出席していただいた研究室主任や指導教員から聞くこととなりました。

名和 そのころの連合会の会長は福武直^{ただし}先生でしたか。そのころは大学紛争のあとの大学生協建て直しの時期になりますね。

岡安 25歳で東大生協に就職することになりましたが、その時の理事長が福武直先生です。福武先生は間もなく理事長のまま大学生協連合会の会長理事に就任されました。有名なのが「会長所感」ですね。学生生協から大学生協へ、やっかいな存在から頼りになる存在へ、赤字を良しとしてはいけないなど、先生自身が全国行脚から得た信念を提起さ

れましたね。その時わたしはすでに常務理事で駒場購買の店長を兼任していました。

「所感レジュメ」を勝手連風に職員全体に配ったことを覚えています。

就職時に戻りますと、就職してさっそく、またも1年目から生協労働組合の執行委員です。(後に執行委員長もやることになりましたが。) そのころの労働組合は「世間並みの賃金を」がスローガンでした。オイルショック後で、賃金が上がっていく頃でした。そのあと80年ころにはいわゆる世間並みの賃金になっていったのではないのでしょうか。

仕事の面では駒場書籍で教科書担当、検収担当を1年半程やったあと店長になりました。当時の生協職員の平均年齢は20歳代後半で、皆が若い時代でした。特に書籍部の職員は購買部に比べても若いんです。

店長をやって1年後には本郷の書籍部の店長になり、同時に労働組合の執行委員長もやることになりました。生協労連の大会にも行きました。ですからその後も生協労連の執行委員や委員長とも交流があります。そのことはその後の専務理事の仕事にとって貴重なものとなりました。なによりも、「はたらく」ということを曖昧にしませんでしたから。これがワーカーズコープで仕事をする下地ということになります。

店長と執行委員長が終わったそのあとに、常務理事になって人事を担当しました。そのころ駒場の購買部の店長が急にやめるというので、専務に頼んで常務理事のまま購買部の店長をやらしてもらいました。なにより書籍の仕事だけでなくほかの仕事もやりたかったんです。そうして1年弱、理事会、常任理事会にも出ながら店長の仕事をこなしていたところ、今度は専務が「ぼくは都民生協にいくからあとはよろしく」ということになりました。

4. 大学生協の専務理事時代

名和 後任の専務は岡安さんにまかせれば問題ないと。

岡安 それは分かりませんが、その専務は同級生でしたから話が早い。そうしてわたしが専務を引き継ぎました。最初の大きな仕事は、購買部・書籍部の営業時間延長です。今では経営成績が悪い、利用者が減ってきた、競争が激しいから営業時間を延ばそうというように「已むなし」となりやすいですが、当時、経営状況が悪いわけではないのに、というより順調でした。悪くないからこそ今のうちに提案するといった感じです。そうすれば労働条件を悪化させない工夫が可能ですから。

交替勤務制を導入しつつ営業時間は伸ばし、同時に、子育てをしている女性職員の労働時間短縮をめざしました(なぜ女性限定なのかについて、その頃は問題になりませんでしたね)。労働組合に提案する文書検討の理事会で、ある教員理事が「営業時間の延長は、労働者に一方的に負担を強いることになりはしないか」とおっしゃったんです。その先生は学生自治会や生協の活動に理解が深く、生協職員からも人望が厚く、労働組

合からの要請（当時の言葉でオルグ）を受けていたお立場でした。それに対して、じっと思案されていた当時理事長の篠原^{はじめ}先生が、「大丈夫でしょう、そのことは考えているようです。ここは理事会として岡安君にまかせておけば大丈夫ではないですか」と発言されたのです。ちょっと予想外でしたが、理事長の言葉は大変うれしかったですね。その後、労働組合は大会で提案を受入決議をしました。

また、慣行的に定例で開催していた上半期決算のための秋の臨時総代会をやらないことにしました。必要な役員補充選挙だけにし、あとはせっかく集まるので食堂のテーマで総代交流集会を企画しました。その時の話です。企画検討の常任理事会では当初、不安意見が続出でした。理事はそもそも周りの組合員から「まずい」などの生協への不満を一杯聴いていたので、そんな会合を持ったら收拾がつかないということなのです。でもまあ議論の末実施しました。食堂の調理師も参加です。するとどうでしょう、何と色々な積極提案が出てきたのです、それも実際に実施できそうな提案です。「お盆（トレイ）は黒ではダメだ、洗剤の跡が見えてしまう」??、みんな笑いました。あたたかい意見が続きました。その時これは本物になるという実感が湧きましたね。翌年、購買も行い、今度は事業連合の商品担当にも出席してもらいました。

ならばと、理事はもとより、学生委員や院生委員、職員委員と生協職員が一堂に会して交流する場を設け、自由に討論できる場を作りました。わたしはあいさつだけ、基本提案や司会はみんな委員会メンバーがやったと思います。一般の生協職員にとって学生や教職員と話ができることはうれしいことなんですね。逆も又そうなんです。そこで確認されたことは、理事会の責任で総代会の提案にすればいいわけです。



また、こういうこともありました。本郷の学生委員会（3～4年生）の合宿に食堂の店長を出そうとしたんですが、店長らは「大学も出てない者が東大生と話が合うか、一方的に言われっぱなしになる」と嫌がっていました。「専務もいっしょに行くなら」としぶしぶ行きました。（実際にはわたしは行かなかったんですが）そうして合宿から帰ってきた店長は、身構えて行ったところ、予想に反してわたしを大切にしてくれる。「学生から感謝された、生協はいいところだ」というのです。当たり前ですが生協の良さは「協同の場」なんですよ。

そのようにして、まわりの人たちが専務であるわたしに確信を持たせてくれていたわけです。いまごろ言うとも申し訳ないですが、わたしにとっては「仮説を提案して実施効果を見る実験と経験の場であった」と納得してしまいます。こういうのが、その後、大学生協の連合会で専務をずるずると長く（15年も）やってしまった要因かも知れません。

名和 近頃思うのは、生協の学生、教職員、生協職員はそれぞればらばらになってきている

んではないかと。学生にかかわることが少なくなり、その結果、学生同士が内向きになりサークル化していくということです。そうしたなかで専務が学生委員会の活動をストップさせるという事象すらおこってきています。

岡安 それはもったいないですね。学生が活動を通じて市民的成長できるのが協同組合の場だと思っていますので。そのためには、生協自体の活動が社会性をもって発展しなければダメですよ。

今度は普通の一般組合員が私を育ててくれた話題です。かつては書籍部にしっかりした本のカバーが置いてあったのを覚えているかとおもいます。あるときわたしの前を歩いている書籍部から出て来たばかりの2人の学生の話が耳に入りました。1人がカバーを一杯持ち出したのをもう一人が聞いていました。「なんでそんなに持ってきたのか」「部屋の本に付けたいんだ」。どうもそれは生協で買った本にはないようでした。その友達は「そんなことをすれば生協が赤字になるじゃないか、やめろよ」と、学生が生協の赤字云々を言っている。思わず追い越して彼らの顔を見ましたが、知らない顔でした。学生理事でも学生委員でもない普通の学生が生協の赤字を心配する、なんともはや生協でなければ体験できないような場面でした。

名和 当時の読書推進活動はすごかったと思います。学生や先生を集めてシンポジウムを最初は東京学芸大で、それから京大、東北大で開かれたと思いますが、たしかそのとき岡安さんが報告されていましたね。京都府医大の学生から医者になるためにはどんな本を読めばいいか、という質問があり、それに対して本のリストをつくるということがありました。また絶版になった書籍を復活させる取り組みもあり、大学生協の役割は大きいということを実感しました。ただその後は動きが鈍くなってきたのは残念ですが。



岡安 大学生協グループは書籍業界の中でも強い影響力を発揮できていました。今は分かりませんが、当時は大学の構成員1人当たりの購読量は一般の5倍と言われていましたし、グループ別売り上げ（総供給高）は大学生協連は2位か3位のランクだったと思います。ですから「復刊本」運動も組めたとおもいます。しかし、90年代に入り、書籍の勢いも衰えてきました。

そんなある日、岩波書店や有斐閣、筑摩、みすずなどの幹部のかたがわたしと話をしたいと一献傾ける場がありました。「社会科学の本が売れないのは生協が売るのがないからではないか」と言う流れになりました。それに対してわたしは「社会科学の本は世の中が激動しがたがたしている時に読まれるのではないですか」と返したのを覚えています。

似たような話は東大生協時代にもあって、「書籍部は売れば良いという姿勢に見える、もっと良書を普及するために品揃えを強化すべきだ」との発言が総代会などでしょっちゅうありました。「この本を読むべきだという品揃え方針は変だ。それは情報操作

に通じる。ニーズを反映させる品揃え方針によって実態が見える」、「品揃えでイデオロギー闘争をするのではなく、品揃えはイデオロギー闘争の反映ではないか」などと居直り的な(笑)弁明をしたことも覚えています。ですから一方では大学院生が編集する「書評誌」に重要な意味がありました。

名和 その頃大学生協では東大でも京大でも書評誌がどんどんつくられる時代でした。何十年経た今でも東大でも京大でも続いています。京大は「綴葉^{ていよう}」という名前です。あのころは慶応出身の姜^{きやう}さんが読書推進活動の中心を担っておられましたね。

岡安 そうですね。彼の感性が大事でした。その後いろいろありましたが、連合会組織の刷新をめざして、部課長制度をやめてチーム制を導入しました。そうなれば専務理事の位置づけはどうなるのか、という議論になったときに、わたしは「うまくいけばわたしは専務を降りる、失敗すれば責任を取って専務をやめる」と言ったことを覚えています(笑)。

名和 大学生協の現場を去られた現在、大学生協におっしゃりたいことはありますか？

岡安 辞めた組織に対していま特に言うことはないです、後の人がやることですから。

5. ワーカーズコープの思い

岡安 現在の仕事(ワーカーズコープ)に就くきっかけはアジア地域の生協づくりで90年代前半にあちこちまわったことに始まります。「大学生協オリエンテーションセミナー」と銘打って、タイを皮切りに、フィリピン、インド、マレーシア、インドネシア、ベトナムなどを回りました。韓国、中国、シンガポールは別個の交流だったと思います。これをベースにして90年代半ばに「ICA アジア太平洋地域大学生協小委員会」を発足させ議長に就任しました。

向こうの学生は人口の3~4%に過ぎないエリートですが、だからこそ「そのエリートが自ら国の貧困問題や社会問題に関心を持ち、協同組合運営の体験をした若者が毎年排出できる大学生協は大きな意味のあること」と話しました。これらの国では包括的な協同組合の連合会を持っており、ほとんどが協同組合省や大統領府の協同組合振興部署を持っています。こちらは大学生協連という小さい分野であっても相手は協同組合の連合会や国の機関です。この協同組合的人づくりが、協同組合のリーダーや国の幹部の賛同を得たのだと思われます。

そうしたなかでフィリピンではフィリピン大学の学生中心に、貧困地域の住民で作る売店づくりを支援する企画や、障がい者が運営する協同組合と連携をとったりする活動が始まりました。協同組合は自分たちのためだけに活動するというのではなく、貧困や社会問題に目をむけ関わっていくことに意義があるんだというようになっていったわけです。わたしはその時に知り合った障がい者の仕事おこしのための協同組合(「BBMC」という多目的協同組合)と十数年来のお付き合いを続けています。

一方でその頃、日本の90年代はじめの社会問題としては「学校でのいじめ」が大きな話題でした。何か今でも変わりませんね。ここからが本題ですが、わたしの思いはこうでした。「いじめられる子もいじめる子も、共に生協組合員のお子さんの場合が多い。ならば組合員同士で良い対応ができるんじゃないか。これは他の組織ではなかなかできないことであるまいか」と、とある信頼していた地域生協のリーダーに聞いたところ、「教育問題なら大学生協がやればあ」とか「そういうことをすると逆に組合員同士の人間関係がおかしくなるのでやらない」というものでした。後者は結構な幹部の女性リーダーもそう言ったと言うのです。

おっと！という気持ちでしたね。理屈っぽく言うと、地域の関心事よりも生協の経済行為ですかあ。たしかに共益組織ですからそうかもしれない。でも、これじゃあいじめはなくなるかな、さらには地域の最大の関心事を避けたら生協の存在価値がなくなるのになあと率直に感じましたね。共益組織の最大の弱点になるかもしれないと思えるようになりました。

変な言いかたですが、わたしは、生協や大学生協の組合員はおおむね社会の「上澄み層」であるという認識を持っています。簡単に言えば、社会的に（すなわち協同組合外で）一定の安定的収入のある人たちです。生協は、生協外で得た収入を前提に自分の生活支出を節約する協同組合ですよ。消費場面での協同組合です。今、若者などの収入



が保証されず不安定になっている。農協や事業者などの第一次産業や第二次産業、第三次産業に従事する人たちが自らの生活のために結成する協同組合は主に収入確保です。生協の直接的関心の「より良いものをより安く」のスローガンは消費者型ですが、協同組合は「一人は万人のために、万人は一人のために」が万国共通です。これはもともと地域共同体で使われた標語だと聞きました。

アジアの国々でも、消費者の協同組合を利用できるのは社会の上澄み層だ、この上澄み層が貧困問題や社会問題に関心がなければ結局社会の害になる。ということを知識しなければ、それは力を持った「多数派」が他を抑圧する存在にもなるということだと思います。生協組合員が80%でも90%にもなっても、生協組合員が組合員としか交流しなかったとする（いわゆる共益団体として）と、地域が良くなるとは限りません。ある時には多数派の差別によって過激な犯罪が出現するだけです。地域が良くなるのは活動に地域の共同利益・一般利益という公益的視点が必要だからです。災害時が典型でしょう。なんて思っています。

現在活動しているワーカーズコープの組合員は歴史的には社会的矛盾を抱えた人たちがつくりあげてきたものです。その矛盾は主体性として見れば、運動の梃子でもあるんですけど、社会的に排除された人たち、生きにくさをもった人たちの声に耳を傾ける、傾けられる感性を培っていると言えます。

そのパワーこそが協同組合の源流であって、今後本流になっていくと実感しています。ワーカーズコープの働きかた（協同労働）を基礎においた、社会的協同組合や社会的企業の役割（社会統合の役割；社会サービスの提供においても、労働することにおいても排除されない仕組みを事業で担う協同組合・企業）が大切になっていくと思われま
す。そういう立場でこれからも力を発揮していきたいと思っています。

名和 本日の大学生協寄付講座「協同組合論」で講義していただいた岡安喜三郎さんから、大学生協の歴史に立ち返りつつ、協同組合の精神について教えていただきました。今日は講義とともにインタビューにもお付き合いいただきありがとうございました。

(2014年8月30日・キャンパスプラザ京都にて)